

時空保護隊ツァイトリッター

第5話 プレシア最後の依頼とリンディの本気なのです

「なあ、フェイトちゃんのお父ちゃん、仕事で亡うならはった、言うてたなあ」

「あ、うん」

フェイトのはやてへの返答は、不自然に遅れた。

「密輸団の取引所がガス惑星の表面近くにあって、追っかけてるうちに近づきすぎて、クルーを逃がせるだけ逃がして、自分は最後まで操縦を続けたんだって」

「偉い人やん。それで、フェイトちゃんの心配事は、何なんや」

「わかる？」

「なんとなくやけどな」

「母さんとお兄ちゃんには、内緒ね。私」

フェイトは言いよどんで、声を小さくした。

「ほんとに、父さんや母さんの子供なのかなって」

「なにをアホな」

「似てない…でしょ」

フェイトは、作戦室にかかった隊員たちの肖像画に歩み寄った。並んだ肖像画の端には、クライドのスナップ写真が大きく引き伸ばされて飾ってある。小さいころのクロノを肩車した写真。それを前にして、フェイトはつぶやいた。

「父さんと一緒に写ってる写真がないのよ」

はやては、あいまいに微笑するしかなかった。フェイトが写真を見る目は、その言葉とともに、どこかうつろだった。

「父さんが死んだとき、私がちっちゃかったからだっていうんだけど」

自分によく似た、プレシア・テストロッサの娘の面影が、その額縁の中に浮かんだ。

「母さん…母さん」

アリシアは、椅子にかけたままのプレシアを覗き込んだ。さっきからほとんど動かず、何かを考えている。リニスは何屋に入ろうとせず、出ようともせず、ちらちらとプレシアの様子をうかがっている。

無言でプレシアは立ち上がった。同時に発した言葉は、厳しくはあったがほとんど感情はなかった。

「プレシアに逃げ場なしか」

プレシアは夜天の書を出し抜く方法を考え続けていたのに違いなかった。目の前のアリシアに向けた目に、ようやく関心の光が点じた。悲しげな視線を向けられたアリシアは、それを非力への不満と受け取った。

「お母さん、ごめんなさい。あたし…弱くて」
「…アリシア、いつかはお前も、絶対勝てない相手にぶつかる時が来る」

プレシアの口調は、見たことがないほど優しくかった。

「あきらめるなとか、がんばれとか、そんなことじゃ力の差は埋まらない。だがアリシア。人間は死ぬまで生きてるんだ。生きてる奴は、脅威なんだ。お前も」

プレシアは一言一言をゆっくりと話した。アリシアの心に吸い込まれることを念じるように。

「何をするかわからない奴になるんだ。力の差はどうしようもなくとも、自分の持つてる可能性を無駄にするんじゃないよ。いつも片手を空けておくんだ」

アリシアはうなずきながら、プレシアをまっすぐ、どこか不安げに見た。プレシアの表情が、ますます柔らかくなった。アリシアの不安を除こうとするように。リニスはその全てが、プレシアの状況判断の厳しさを暗示するようになって、使い魔には珍しく息苦しさを覚えていた。

空間が揺らぐ感覚が、三人三様の感慨に割り込んだ。リニスはさりげなく、空間の揺らぎと主人の立ち位置に割り込み、主人の盾になれるようにした。

夜天の書は、言った。

「これがプレシア・テストロッサへの最後の依頼となる」
「ほう、お役御免ということで」

懇懇だが警戒感を隠そうともしないプレシアにかまわず、夜天の書は話し始めた。

はやてが格納庫から上がってきて、作戦室に全員がそろった。

「なのは世界? なのはって自動車か何かの名前?」
「あまり聞かない名称ですが、人名と思われます」

エイミーは、夜天の書が指定してきた世界名と時空連続体座標から、世界の様子をたどり始めたところだった。

「夜天の書は、封印されない、か。結局これが狙いなんだったら、なぜ最初からそうしなかったんでしょか」
「木を隠すなら森の中ってね」

リンディはそう言いながら、まだ考えているようだった。

「夜天の書が別の世界の夜天の書を応援する。わかりやすすぎて、隠したことになるわよね。エイミー、通信をつないでちょうだい。通信先は、プレシア・テストロッサ」

全員の視線がリンディに集まった。そして誰もが驚いたことに、ツァイトリッターを名乗ったその通信を、プレシアはあっさりと受けた。

「ツァイトリッター隊長、リンディ・ハラウンです」
「プレシア・テストロッサ、悪党だ」

無言のらみ合いは、すぐにプレシアの哄笑によって破られた。

「わかってるじゃないか。あたしが利用されてるだけだってこと」
「情報が欲しいの。夜天の書の」
「取引かい」
「そうしたければ、ね」
「あたしは、言われたことをするしかないのさ。裏の事情も聞かされちゃあいない」
「言われてないことも、やったんじゃないの」

リンディはジャブを放った。前回(第4話)の襲撃が突然強力に干渉されたことから、干渉者が夜天の書だという可能性はあったが、それは憶測でしかない。プレシアは微笑で消極的に肯定すると、何かを思い出したように真剣に口調を変えた。

「言えた義理じゃあないのは、わかってるんだが、他にいないから言うよ。もし…戦いの後で、アリシアだけ見つかったら、その…気をつけちゃあ、くれないか」
「そういうことは、やることやってから言いなさい。自分の意地で、子供ほっぽらかしたりしたら、後のことなんか知らないんだから」

言葉は厳しいが、リンディの口調にはトゲがなかった。10年来の友人に話すようだった。

「夜天の書は、歴史を回したがつてる。何でも見て、何でも聞いている」

プレシアは、夜天の書がこの通信を聞いている可能性をほのめかした。

「誰に歴史を回させるかってことさ。切るよ」

一方的に通信を切られた後のスクリーンを見ながら、リンディが考え込んだので、みんな黙り込んだ。出動命令がまだなことにはっと気づいて、リンディは言った。

「今回はひとり残らず出撃。ラインちゃんはリッターアルフ、なのちゃんとユーノくんはエステシア。行くわよ」
「はいっ」

「この世界の夜天の書は、闇の書と呼ばれています。魔法のデータを魔力とともに集めて破壊のために使用するもので、すでに長いこと暴走状態にあります。現在、ミッドチルダ時空管理局が確保し、次元航行艦隊が護送中」
「あら、ご同業なのね」

リンディの笑顔は、エイミィが次のデータを読み上げた瞬間、別のもの変わった。

「護送中の艦はエステア、艦長はクライド・ハラウン」

リッターアルフでは、クロノとフェイトが猛然とコンソールを操作した。やがてクライドのエステア、そしてそのブリッジの様子がコンソールに映し出されてきた。フェイトには写真でしか見たことのない人物、クロノにもおぼろげな印象しかない人物が、そこにいた。

「まもなく、本来の歴史では闇の書が封印を脱し、艦のコントロールを掌握、艦隊に向けて主砲発射を試みますが、艦隊司令官グレアム提督が先んじてこれを撃破、乗員はクライド艦長を除き…」

「いやああああああっ」

リンディの絶叫が、エイミィの説明をさえぎって、リッターアルフのブリッジに響き渡った、

プレシアの宇宙船も、次元航行艦隊から少し離れたところに遊弋(ゆうよく)していた。プレシアが何の指示も出さないので、リニスは困ってしまった。この状況はどう見ても…

「リニス、まさかこの状況で、何かできると思ってるんじゃないだろうね」

「プレシア様、それでは」

「少なくともクライアントは、あたしたちが同じテクノロジーの艦隊を打ち破るなんて、期待しちゃあいないと思うよ。魔力反応はどのくらい出てるんだい」

「Sクラス 12、AAAクラス少なくとも 80」

リニスの答えに、プレシアはため息をついた。

刻々と運命の時間が近づいていた。

「あ、あ、あの一」

遠慮しながら、恐れながら、ユーノがそっとリンディに言った。

「クライドさんを、こっそり助けちゃうのはどうだろうって、メカたちがいうんです」

本当は「ユーノといっしょに飼っちゃえばいい」となのメカたちは言ったのだが、そのまま言うわけにも行かない。リンディの返答は硬かった。

「歴史が変わっちゃうじゃない」

「だから、こっそり助けるんです。この世界ではメカ兵器を毛嫌いしてるみたいですから、魔法を控えれば探知されにくいはずです。メカたちを内部に忍ばせて、最後の瞬間に脱出させるんです」

「助けた人を、どこに連れて行くの。歴史に影響が出ないってことは、その人は何もしない、何もできないってことでもあるのよ」

「うちらは秘密組織なんやし、仕事はあるんとちゃうのん。変身魔法で、出歩くこともできるやろ」

はやてに言われて、リンディの心の揺れが、ある線を越えた。

「…いいわ。そう…もう一度プレシアに通信を入れます。手伝ってもらいましょう」

宇宙船のエアロック手前で、プレシアはぶつぶつ文句を言いながら、式札にさらさらと梵字を書いている。

「まったく、捨て石ならてめえのメカにやらせりゃいいのに。紙も限りある資源なんだよ」
プレシアは、エアロックの中に式札を放ちながら、呪文を唱えた。

姿あるもの 象(かたど)るもの
我が望みに任せ かりそめの現(うつつ)となれ

式札はくるくる回転すると、カーキ色の制服を着た、ドールサイズのタヌキになった。プレシアはエアロックを閉じると、ニコリともせず軽く手を振って、ブリッジに戻っていった。

闇の書が封印を脱し、エステシアの制御を乗っ取り始めるのと、チビダヌキ式神があちこちで光弾を放ち、エステシア艦内への瞬間移動から艦隊の気を逸らすのが、ほぼ同時だった。

なのメカとラインは集団でブリッジに向かった。クルーは闇の書が送り込んだ手先と思いい込んで反撃してきたが、ラインが武器を凍結させ、クルーを気絶させては脱出口に続く経路まで運び、他のクルーに発見されたら放り出して逃げた。クライドの総退艦命令は、艦内放送を通じてメカたちにも聞こえていた。

「クライド・ハラオウン艦長でいらっしゃいますね」

艦長室に押しかけたなのメカとラインを通じて、エステシアの通信システムに音声と映像が送られた。

「リンディ」

「私は別の並行宇宙にいる、リンディ・ハラオウンです。私の夫もクライドといましたが、すでに殉職しました。私は次元犯罪者を追って、この事態に遭遇しました」

多くのことを、短時間で説明しなければいけなかった。爆発しそうになる感情を抑えなければいけなかった。リンディは平静に話した。感情を込める余裕がなかったのだ。

「私たちは歴史を曲げるわけにはいきません。でも、もしよろしければ、あなたの世界ではここで行方不明になって、私たちの世界で暮らしませんか」

クライドは黙った。そして、笑顔で首を振った。横に。

「リンディさん、私はここで倒れても、天国にも地獄にも行きません」

リンディの瞳がかすかに濡れていたが、その視線はまだまっすぐスクリーンを向いていた。

「リンディとクロノのところへ行くんです。別の世界ですこし余計に生きて、永遠にお別

れなんて、いやです。でも、もしできるなら、お願いがあります」

クライドの口調は、その内容につりあわないほど、温かかった。

「エスティアを、沈めてくれませんか。グレアム提督はためらって、間に合わないかもしれない」

リンディはうつむいた。たまっていたものが、キーボードに転々と落ちた。

「待って! なに、これ」

エイミィが叫んだ。エイミィのコンソールにある緑の歴史分岐が、ある時点から突然真っ赤になった。

「わかった…グレアム提督が闇の書の追及に人生をかけることが、最終的に闇の書が消滅する鍵になっているんです」

「どういうこと」

「もし自分で引き金を引いてエスティアを破壊しなければ、次の闇の書は発動せず、次の主である八神はやて…はやて!」

「えっ? えっ?」

はやては、突然自分が歴史上の偉人になったように、自分の五体を意味もなく見回した。

「八神はやては完全な覚醒前に見つかって、闇の書に吸い取られて、闇の書だけ逃げてしまうんです」

「グレアム提督に、撃たせないといけない、か。夜天の書は、私たちにこれをさせたかったのね。次の復活で負けることを、いま防ぎたかったのね」

リンディが言った。もう涙は枯れ切ってしまっていた。

「ごめんなさい。なにひとつ…なにひとつ、してあげられないなんて」

「いやあ、とても感謝してますよ。いま一番聞きたい声を、聞かせてもらった。クロノもいるのかな」

「は、はい。クロノです」

「僕が言うのもおかしいもんだが、母さんを頼むよ」

エスティアの通信システムが、別の交信要求を告げた。

「グレアム提督だ。じゃ、切ります」

クライドは最後まで微笑をたたえていた。

リンディが椅子に身を沈めたまま、指示が出てくる様子がないので、クロノが身を乗り出した。

「なのメカとですメカ、聞いての通りだ。帰投してくれ」

なのメカとリインは密集して、闇の書が放った質量弾に見せかけ、応射を受けると分散して、撃破されたかに装った。

そして、エステシアは轟沈した。

「お取り込みだとは思ったんだがね。夜天の書から連絡があった」

プレシアからリンディに連絡が入った。

「怒られた? 私たちに協力までして」

「どうでもいいんだろうな。何も言われなかったよ。それより逆探成功だ。奴はいるよ。

11年後の、この世界に」

「なぜ最初から、そうしなかったのかしら」

「因果はめぐる糸車ってね。あたしが動き回ると、あんたらがついてきた。夜天の書、追われているのかもしれないねえ。だから本命の時空間に近づきたくなかったのさ。もちろん追うだろう」

「管理局の白い巨砲、リンディ・ハラオウンの心に塩を塗ったこと、後悔させてやるわ。ありがとう」

「白い…巨砲」

エイミィが不思議そうな顔をした。はやてが続けた。

「整備のときに前から気になっとった。レイジングハートのバレルに刻まれとる、太陽3つに三日月7つ、あれキルマーク(撃墜・撃沈を誇示するマーク)ですか。恒星3つに惑星7つ」

「そうよ。もともと私のデバイスだもの」

「時空管理局直轄、戦略重砲第一連隊、たしか戦闘員はひとりで、それが引退したから廃止になった」

「よく知ってるわね」

「いつもの母さんじゃない」

クロノは、思わずつぶやいた。

「さあ、いったん帰投して、すぐ出発よ。ん? なに、なのちゃん」

戻ってきたなのメカが、何か差し出している。

「手帳を家族に渡して欲しいそうです。それから、これはリンディさんに。ありがとうって」

ユーノが通訳しながら、電子手帳と写真を差し出した。

写真には、クライド、この世界のリンディ、そしてこの世界の小さなクロノ。

リンディは、泣いているような笑っているような顔になった。

顔色を蒼白にしたフェイトには、誰も気づかなかった。